

# ザ行・ダ行・ラ行の混同とその聴取及び発話について

——和歌山県北部の場合——

杉 藤 美 代 子  
木 村 恵 子  
稲 田 裕 子

## 1. はじめに

和歌山県伊都郡の小学2年生(女児)の日記から、その担任の先生が次のような混同例を拾い出して送って下さった。

うでしい(うれしい)、いでて(入れて)、おばあちゃんざ(ら)、くでた(くれた)、けでろ(けれど)、こでで(これで)、そでれ(それで)、そでは(それは)、わらわでたら(笑われたら)。

これらは、レ→デ、ラ→ザであり、和歌山県のザ・ダ・ラ各行の混同の実態の一部を示すものである。

同郡の他の小学校からは次のような、かなふりに表われた混同を示す結果が送られてきた。(6年生87名一男40名、女47名)

下水の溝(18.4%)、バラの造花(17.9%)、交通安全(16.1%)、座談会(8.3%)、北風(8.2%)、私の家族(7.1%)、お地藏さま(6.9%)、南海電車(3.4%)、首飾り(3.4%)、横断歩道(1.2%)等々。

これらは、ザ→ダ、ゼ→デ、ゾ→ド、ダ→ザ、デ→レであり、混同の実態をかなりよく伝えている。

さて、日本語のザ行とダ行には、近世初頭以後、一部の地域を除き、i列u列に「四つがなの混同」が行われてきたことは周知の通りである。ザ行は多くの場合破擦音になることから、その調音点がダ行に近いために、a、e、o列においてもダ行と混同し易い性質を持っている。その上ラ行音が、「流音」というよりは、軽い破裂音であり、その調音点がa、e、o列においてダ行音に近い<sup>1)</sup>から、

これら三者は、ことに西日本における子音の弱い発音では混同し易い状況にあると言うことができよう。

この研究は、それらザ行・ダ行・ラ行の混同に関して次の問題を検討することを目的としている。即ち、これらの音が混同して発音される地域の分布と混同の実態とを調査することにより、一つには方言音の変化ないしは音韻変遷の問題を検討しその誘因を考察すること、又他には、聴取と発話に関し、言語音自体の持つ性質を検討することである。さきに、一番混同の多いと見られた兵庫県多紀郡（現在篠山町）の調査結果を報告した<sup>2)</sup>が、今回は、更に複雑な混同を示すと思われる和歌山県の場合、ラ行音をも加えて、その状況を概観し、そのうち、紀北地方の聴取と発音に関して実地調査を行った結果を報告するものである。

## 2. 問題の所在

『ダ行ザ行間の訛りについて— その誘因に関する臆説—』（原田芳起・1955年）<sup>3)</sup>に於ては、和歌山におけるザ行とダ行の混同は、以下に述べるような音韻変遷ではなくて、近代になって起った一種の音の取り違えであると説明している。以下、しばらくこの論文について解説を試みる。

即ち、古代国語に起った、サ行タ行ダ行相通の現象は、悉曇学者たちが既に気づく所であったが、それより早く「豊後風土記」に、その地名に見られる混同を指摘した記述がある。

①口「久津媛殿」今謂「日田郡」訛訛也。

②冬口「豊泉」今謂「球磨郡」訛訛也。

これに関し上記著者は次のように説明する。

(1)は、地名の「ヒサ」が「ヒタ」と転じた

との解釈であり、(2)は「クサイヅミ」と訓じているが、おそらくは「クサミ」と訓んだもので、これが訛って「クタミ」となった。肥後の温泉に現在「クタミ」なる地名があるから、温泉を「クサミ」「クタミ」といったことはまちがいが無い。そこで風土記編集当時の九州の音韻が、サとタと近い状態であったことを示すとされる。

又、有坂秀世の推定によれば、平安朝初期のサの頭音は〔tsa〕であるが、その以前は〔tʃa〕であったと推定して、風土記編集当時、九州ではサとタとの音が近い状態であったと指摘している。

一方、「和歌山県方言」（和歌山女師・日方高女編）に記述された混同単語群の音素構成を検討し、この混同に関して次のように通則を立てる。

1)語頭のゼはデに、ゾはドに転じた例が多いが、その逆は見当たらない。

2)語頭のザはダに転じた例が多いが、その逆は少い。

3)語頭以外では〔ndz>nd〕の方向は見られるが、その逆は見当たらない。

1)2)3)以外では、転訛は交互的であり、アクセントなどの関連もなさそうであるとの推測も加えられている。

さて、この通則と、大阪市周辺の音声の観察とに基づき、混同の

誘因を次の2つと見ている。その一は

“[s] [dz] の軟音化”であり、他は、近世以来のザ行ダ行の子音の変遷を仮定して、

“推移に地域的な遅速のずれが生じ、これが異なった方言地域からの語彙の移入に際して多くの錯誤を生じたもの”

としている。「和歌山県方言」に記載された語彙に漢字が多く、方言としては新しい語彙を含んでいるという点で、これらの訛りは

“音韻変遷でなくて、新語の受け入れによる音の取りちがえである。”として、この訛りが上記の如き古代国語に起ったと見られる音韻変遷の現象とは別のものと見ている。

近世初頭以後、所謂四つがなの混同が行われ、現在では、一部の方言を除き、ジ・ヂ、ズ・ヅの区別が全く失われているが、この著者によれば、現在和歌山地方に行われているザ行とダ行の混同は、このジ・ヂ、ズ・ヅの混同以後、近代になって起り、現代（昭和30年）にもまた新たに起りつつある現象と捉えている。

いずれにしても、この訛りを、日本語の音韻を考える上での問題として取上げた点、及びその考察の方法等に於いて、これは注目すべき論文である。

この混同が、そこで述べられた如く、古代に於ける音韻の変遷とは別に、近代に起り、現代にも起りつつあるものと見るべきものか否かに関しては、今の所、追従し、又は反論すべき明確な資料は整っていない。然し、この混同に関して江戸初期の「片言」に記載のあること、又、沖縄にまで及ぶ分布の広さ、混同の実態等から推す

と、ザ行ダ行の混同の歴史はかなり古いもののようにも思われる。また和歌山方言におけるザ行、ダ行、ラ行の混同が、“新語の受入れに際して訛った”と見るよりは、発音自体の混同が先であり、混同が漢語に多いのは、別の理由、即ち音素構成上の発音のしにくさ等も考慮に入れる必要があろうと思われる。

然し、問題は簡単に解決されるとは思われない。そこで、混同の実態を調査して、次に示すように聴取と発音の両面から主に音素構成の点に関して検討した結果を、この度は述べる。

- 1) 混同地域における単語の聴取では、どの音からどの音への混同が多いか。またどのような音素構成の無意味語に混同が多いか。
- 2) 聴取と発話との関係はどうか。
- 3) アクセントの相違により差がおこるか。
- 4) 紀北における混同は、漢語に問題があると思えるべきか。

この度は紀北に重点を置くが、上記文献に即した検討を行うためには、更に変化の実態を広く調査する必要がある、又調査地点等についても検討を要すると思われる。

なお、この稿においては、ツ、シはtsu, fi 等、すべて発音記号を用いるが、まぎらわしさをさけるために、便宜上、ザ行の表記にdzを用いず、zをdと聞く、又は発音する、等の場合にはz→dのように書く。又、上記のように撥音が混同と関係する点もあるのでこれも音韻記号でNのように表記する。

### 3. 丹波篠山における調査及び今回の調査の方法

3.1 混同の分布 図1は、国立国語研究所の「日本語地図」から、ザ行音又はダ行音を含む語彙の地図(風、税金、数える、痣、畔畦)を選び出し、それらを重ね合わせて、該当音の混同の分布している範囲を、示したものである。この地図上に見る混同地域は、南は



図1 ザ行音とダ行音の混同地域

(日本語地図の重ね合わせによる)

\*風→kade ▲税金→deikiN <→印那賀郡粉河>  
+畔畦→ade □痣→ada ×痣→ara ■数える→kadoeru

沖繩、九州、東は千葉県、群馬県の南部、山梨県北東部、伊豆半島と伊豆諸島房総半島南部に至るまで、広い分布を示しているが、実

際には広く、北陸、東海、山陰、四国、九州の各地に分布しているものと考えられる。<sup>4)</sup> この混同は瀬戸内海をはじめ、島々に分布している点にも特徴がある。

混同の一番多い地域は、兵庫県の中央部(丹波篠山を中心とする)から京都の西部、大阪府北部にまたがる地域である。そこで先ずこの地域について調査を行い既に、概要、次のように報告した。<sup>3)</sup>

#### 3.2 篠山の場合

(1)アンケート調査 日本語地図に見られた混同地域の地点を調べ、それら及び隣接地点にある各町村の小学校、中学校及び各地点につき1校の高等学校を選び、合計375校に依頼しアンケート調査を行い、178校から回答を得た。兵庫県等における混同の範囲は上記地図の示す分布より広いことが明らかとなった。

(2)実態調査 その中で一番混同の多いという結果を得た兵庫県多紀郡(50年に西隣の篠山町に編入された)の3つの小学校、1中学校及び1高等学校の331人の児童・生徒を対象として聴取実験を行い、その中から無作為に抽出した56人に於ける混同の実態を調べ、両者を比較した。大人たちの発話とも比較し、更に非混同地域の、東大阪市の小学校の実態も調査して比較を行った。

語彙178単語の外、無意味音の聴取と発話を検討し、次のような結果を得た。

(3)結果 発音の混同については、先ず、z→dが多く、混同の多い人々は、殊に殆んどz→dの混同であり、聴取と発音と、両者の混同の関係が深い。

混同し易い単語の音素構成は次のようである。①語頭に *z* がある場合 *d* になる傾向が強い。(例)雑誌→だっし、座敷→だしき ② *N* に後続する *z* は *d* になり易い。(例) 暗算→あんだん、犯罪→はんだい ③その他の *z* は①②の場合に比して *d* になりにくい。

この結果は上記文献2)の和歌山方言の場合の文献による考察と類似のものである点に注目したい。又、混同者の多い単語は *z* の前が広母音であり、混同者の少ない単語は *z* の前が狭母音という傾向がある。

大人は混同がより多く、又、*z* → *d* の単純な混同のパタンを持つのに対し、子供たちの聴取と発話の混同は、パタンが単に *z* → *d* のみならず、*d* → *z*、*r* になるものもあり、多様性が見出されるが、中学生をピークとして混同は減少の傾向にある。混同の多様化は、方言音が変化していく過程に見られる現象との推測を行った。

上記と同様に、和歌山県に関しても、以下に述べるように、学校を対象としたアンケート調査により混同の概観を得、一方調査地を紀北に定め、紀ノ川の上流、中流、下流の3地点の高校及び1地点の中学校において聴取実験を行い、一部の発話を録音し比較を行った。但し、3地点の差は顕著でなく、今回は粉河の資料を多く用いた。

**3.3 今回の調査方法** 図1に見られる和歌山県下の *z* → *d* の混同地点及び混同語彙は、次の通りである。

1. 那賀郡粉河町 *aza*→*ara*, *aze*→*ade*
2. 那賀郡岩出町 *aze*→*ade*

3. 伊都郡花園村 *kaze*→*kade*
4. 日高郡印南町 *aza*→*ada*
5. 西牟婁郡中辺路町 *aze*→*ade*
6. 西牟婁郡白浜町 *zeikiN*→*deikiN*
7. 西牟婁郡串本町 *aze*→*ade*
8. 東牟婁郡熊野川町 *kazoeru*→*kadoeru*

そこで、上記5郡に属する小学校188校、中学校83校、高校8校に依頼して、混同の有無、混同音に関するアンケート調査を行った。

更に言語地図の地点外の、海南市、橋本市、有田市、御坊市、田辺市、新宮市、更に海草郡、有田郡の小学校36校、中学校36校、高校20校を追加しアンケートを送った。合計371校に依頼し247校から回答を得ることができた。その上、多くの先生方から混同に関する様々な記録をいただいた。

和歌山の調査に関しては、既に数年前に予備実験を行い、数人の発話の録音を聴取して、その混同が篠山に於けるものよりも複雑であることを確めていた。そこで今回は、*z* と *d* の外に *r* も対象とし、次のような方法で調査を行った。

今回の和歌山を対象とする実験の、篠山で行った方法との主な相違点は次の通りである。アンケートの結果、混同の一番多い地点というよりも、先ず上記「日本言語地図」で、*z*、*d*、*r* の混同の示されている那賀郡粉川に焦点をあて、先ず紀ノ川の流域の上流・中流・下流の地点(橋本市・粉川・和歌山市)を選んで調査を行った。従って今回の報告は和歌山県のうち、紀北に関するものである。実

験の対象は主に高校生(及び粉河中学生)とした。篠山では、一番混同の多いのは小学生であったが、今回は小学校の調査は後に残し、ことに音素構成による誤聴と訛りの問題の検討を主体とした。そこで前回、無意味音は、「風」に対する「ゼカ」、「座敷」に対して「ザシカ」という種類のものと、ザザザ、ダダダ、ザゼゾ等の45語を用いたが、今回はその他に、2拍語でz、d、rとa、e oの夫々のすべての組合せによるザダ、ゼラ、ドゼ等81語を作って、音素の組合わせによる混同の相違を考察した。

次には、先ず、アンケート調査の結果を説明し、そこから得た混同の概観を述べる。

## 4. 和歌山県に於ける混同の概観

### —アンケート調査の結果

図2は、ザ行音ダ行音の混同の程度を示している。クラスの大部分が混同していると答えた学校数の一番多い郡は日高郡であり、69%に及ぶ。西牟婁郡、伊都郡がそれに次ぎ、問題とする那賀郡は23%であり、前記地図の結果とアンケート調査の結果とは相違がある。

図3は混同の傾向を示している。どの郡も「ザ行音がダ行音になることが多い」又は「ザ行音、ダ行音ともに混同して曖昧に使う」が多く、「ダ行音がザ行音になることが多い」と答えた学校は稀である。

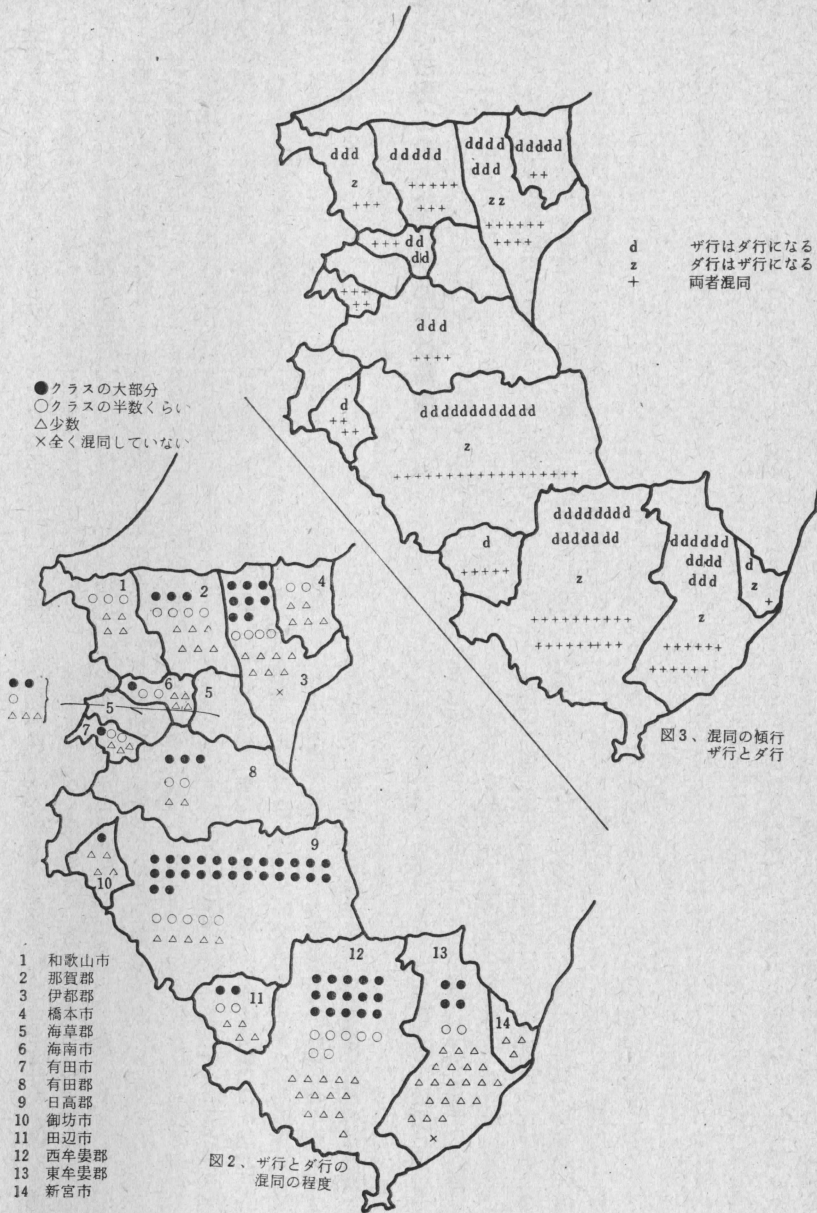
図4は、ザ行音ダ行音の外にラ行音加わった場合の混同の程度を示している。明らかに、ザ行音ダ行音の混同に比べて、ラ行音の混同は少いことがわかる。

図5はその混同の傾向を示す図である。

小・中・高による差について述べれば、小学校の場合、ザ行ダ行に関してクラスの大部分が混同しているとの答は41%に及び、中学では27%、高校ではゼロであり、年齢が進むほど混同が少いという結果が出ている。然し、実地調査の結果では中学生の方が、高校生よりも混同が少い。ラ行の混同に関しては、アンケートでは中学生の混同が一番多いとの結果が出ているが、これは実際と一致している。

回収された殆んどアンケート用紙には、混同に関する先生方の意見がこまかく記載され、この混同に対する関心の強さが伺われた。それらの中では、親の訛りが原因であること、教育の上からはことばに強い関心を持たせることが大切であること等がのべられ、又、聞いていては気づきにくい文字の書誤りが多いと述べる方もあり、或は、英語の学習にもさしさわりのあることを指摘された方もある。これらの先生方の多くは、和歌山県出身であり、「先生ご自身に混同があると思われますか」との問いに、「あり」と答えた方が約半数あった。注目すべきは、次のような見解である。

(1)「混同を注意されて、そのために却って意識しすぎて間違い例がある。例えば『筆』を、注意しすぎて『フゼ』と誤る」(有田郡)  
「ザ行をダ行に発音することをやかましく言うと、今度は全部ザ行





になってしまう」(有田郡)

(2)「子供の中には、ダ・ザはデ・ジと同じような区別とと思っているものもある」(有田市)

(2)のような意見は、篠山の場合にもあったが、(1)のような例は篠山にはなかった。

上記(1)に関連する記述として、村内英一(1950)<sup>5)</sup>には、ザ行・ダ行・ラ行の訛りに関して次のような記載がある。

「ダ行音は普通にはラ行音に訛ることが多く、ザ行音に発音されることはすくない。ラ行音に転訛するのは、破裂の不完全によるのであり、ザ行音に転訛されるのは、訛りの度合の軽いものが、矯正意識の過剰からきた、いわゆる直しすぎの現象である。」

上記の先生の記述と通うものであるが、原因が果してこれだけかどうか今のところ明らかでない。

以下に述べる、聴取と発話とに見られる混同の調査結果からすれば、むしろ $z \rightarrow d$ の混同の外に、 $d \rightarrow z$ の混同タイプがあるように思われ、その原因については、まだ不明である。

## 5. 聴取実験の結果及びその考察

**5.1 単語の調査** 粉河高校2年生45人を対象として、単語115個、無意味語45個及び、前述の81個につき聴取実験を行った結果のうちまず単語に関して検討する。

表1には、誤聴者人数の多い順にすべての単語を挙げた。誤聴者人数の多い単語には次のような特徴がある。

(1)  $z \cdot d$ 又は $r$ のいずれかが語中に重なっているもの。(例、zadankai, doozoo)

表1には、それらに\*印を付している。

混同の可能性が2倍になるというだけでなく、前後の音の影響で聴き誤る率が高くなるとされる。混同者ゼロ又は1人の単語中には、 $z$ 、 $d$ 、 $r$ の重なりを持つものは、20個中3個であり、それらは $z$ と $d$ の重なりでなく、その一方と $r$ とが重なっているものである。

(2) 他の語と誤認し易いもの、(例、現代—現在、市電—自然、尊大—存在、境内—経済、題材—橙)現代は32人、現在は5人が、市電は28人、自然は2人が混同している。従って前者は後者への誤認とも考えられる。

(3) 漢語が多い。これら単語115箇のうち、日常語は37語(32%)、漢語72語(63%)、外来語は6語(5%)である。混同の多い単語の中には、漢語が多いことは確かである。然しこれは、文献2)に述べられたほど重要でなく、むしろ和語に、 $z$ と $d$ 、 $r$ の音の重なりが少なく、むしろ(1)に述べた、音素構成による発音の聴易の問題の方が重要な誘因であろう。語そのものの、日常語か否かによる頻度数の差も問題となりうるかもしれない。

これら、1語中に2種の混同音を含む語が夫々どの音と聴取されたかまとめた。そのうち、 $d$ と $z$ の共存する語の混同傾向は、どの

(\*印の単語はz・d・rのいずれかが1単語中に重なっているもの)

順 位	単 語	アクセント	混同 人数	順 位	単 語	アクセント	混同 人数	順 位	単 語	アクセント	混同 人数
21	飾 り	kazari	6	24	謎	nazo	3	26	午 前	gozeN	1
	賊	zoku	"		覗 く	nozoku	"		畔 畦	aze	"
	造 花	zooka	"		左	hidari	"		鉄 道	tetsudoo	"
22	泥 棒	doroboo	5		児 童	zidoo	"		ロボット	robotto	"
	絶 対	zettai	"		全 部	zeNbu	"		数える	kazoeru	"
	現 在	geNzai	"		心 蔵	fiNzoo	"		ライオン	raioN	"
	灰 血	haizara	"	25	税 金	zeekiN	2	27	大 根	daikoN	0
	安 産	aNzaN	"		大 工	daiku	"		*それぞれ	sorezore	"
23	一 族	it fizoku	4		ス く	azamuku	"		六 百	roppjaku	"
	* 謎 謎	nazonazo	"		婚 礼	koNrei	"		子 供	kodomo	"
	咽	nodo	"		雑 誌	za fsi	"		* 身 体	karada	"
	象	zoo	"		自 然	fizeN	"		ザ ル	zaru	"
	小 僧	kozoo	"		溝	mizo	"		風	kaze	"
	肝 臓	kaNzoo	"		安 全	aNzeN	"		読 書	doku fo	"
	団 子	daNgo	"	26	罪 悪	zaiaku	1		はいらず	hairazu	"
24	* 青 空	aozora	3		運 動	uNdoo	"	* は混同音を2音 含む語			
	* アザラシ	azara fi	"		ラ ジオ	razio	"				
	* 座 禅	zazeN	"		* 奴 隷	dorei	"				
	痔	aza	"		草 履	zoori	"				
	* 糞	mizore	"		電 気	deNki	"				

表1 単語の聴取におけるz,d,rの混同人数—粉河高校2年生45人の場合—

(\*は1語中にz,d,rのいずれか2つ持つもの)

順位	単語	アクセント	混同人数	順位	単語	アクセント	混同人数	順位	単語	アクセント	混同人数
1	* 太宰府	dazaihu	32	13	* デザート	dezaato	14	18	存分	zoNbuN	9
	現代	geNdai	"		* 肌触り	hadazawari	"		全国	zeNkoku	"
2	* 座談会	zadankai	31		銅貨	dooka	"	19	* 膝頭	hizagaSira	8
3	市電	jideN	28	14	大悪	daiaku	13		* 全然	zeNzeN	"
4	* 銅像	doozoo	27		増加	zooka	"		居酒屋	izakaja	"
	脱脂綿	dassimeN	"	15	毒	doku	12		地藏	zizoo	"
5	尊大	sondai	26		堂	doo	"		座敷	zafiki	"
6	* 伝来	denrai	25	16	* デザイン	dezaiN	11		* 骼駄	rakuda	"
7	境内	keedai	23		経済	keezai	"		御前	gozeN	"
8	* 土蔵	dozoo	22		存在	sonzai	"	20	花壇	kadaN	7
	* 題材	daizai	"		振動	jindoo	"		修繕	juuzeN	"
9	* 脱税	datsuzee	20		番台	bandai	"		演説	enzetsu	"
10	* 雑談	zatsudan	19	17	* 電々公社	denkenkooja	10		犯罪	hanzai	"
11	代書	daijo	18		* どうぞ	doozo	"	21	弁才天	benzaiteN	6
12	* 出初め	dezome	17		暗算	anzan	"		* 冷蔵庫	reizooko	"
	* 段落	dannraKu	"		万歳	banzai	"		感動	kandoo	"
	飯台	handai	"		俗に	zokuni	"		* 増大	zoodai	"
	臀部	denbu	"		子象	kozoo	"		* 橙	daidai	"
	炭田	tanden	"		* 道理	doori	"		風俗	huuzoku	"
13	丹前	tanzen	14	18	渾名	adana	9		お膳	ozeN	"

音をどの音と聞いているのか、それにつき一部をあげれば次のようである。( ) 内は混同の内訳を示す。

	単語	混同	(d→z	z→d	z/d	z,d→r) %
(A)	{dazaihu	71	(33	27	11	0)
	{zadankai	68	(22	13	33	0)
(B)	{doozo	21	(4	2	9	6)
	{doozoo	59	(16	22	4	17)
	{dozo	49	(7	29	9	4)
	zoodai	13	(9	2	0	2)
	daizai	48	(4	42	0	2)
(C)	{datsuzei	44	(40	2	2	0)
	{zatsudan	42	(20	13	9	0)
	dezome	37	(0	29	2	6)
	hadazawari	32	(9	16	7	0)
(D)	{dezaato	31	(18	9	2	2)
	{dezain	25	(7	16	2	0)

(A)「太宰府」は聴取の混同が最高でd→z、z→dともにその数が多い。(混同の内容例、ダダイフ、ザザイフ、ザダイフ、ラダイフ) 然し後に述べるが、発話の混同は多くないという稀な例である。「座談会」の混同がそれに次ぐ。(混同の内容例、ダザンカイ、ダダンカイ、ザザンカイ、ランカイ) これはzとdとが交替して発話される例がことに多い。

(B) dōozo (どうぞ)、doozoō (銅像)、dozoō (土蔵)の三者は似た

音素構成であるが、「どうぞ」の場合は混同が少く、zoodoと聞く場合が比較的多く、「銅像」の場合にはdoodooと聞かれる場合と、zoozooと聞かれる場合とがともに多いが、「土蔵」ではdodooと聞く場合が多い。これらの相違の原因の一には、アクセントの違いも考えられるが、「どうぞ」に正答率の多いのは、日常語であるからかもしれない。又、前後の母音の長短により、子音の聞こえに差のあることも考えられる。因みに、[z]の持続時間は、doozoが最長104 msec, doozoが83msec, doozoが40msecで最短であり、この資料だけで、持続時間との関係を論ずるわけにはいかないが、少なくともこの場合は3単語における/z/の聞こえの明瞭度に大体比例している。「銅像」と「土蔵」の聞こえの差は、はじめのdooとdoの差、即ち[o]の長さの差に基づくdとzとの時間的距離に関係があるとも考えられる。

(C) datsuzei (脱税)とzatsudan (雑談)とは、ともに破擦音tsuが介在する。その場合はd→zへの聴取が多いことを示していると思われる。

(D) 外来語の二者はdezaまで同一であるが、後続の音素構成により聞こえに差のあることを示している。あるいは、dezainの場合[in]がzaに後続していることが、zをdと聞かせる原因となるか、前者のzに後続するaが長母音ゆえにzを優位にしているかとも推測される。

これらは、発話者の側の発音の調音結合の問題とも合わせて考えるべき興味ある問題を提示している。

以上のことから、聴取に影響を与える音素構成の前後の範囲は、 $zVd$ ,  $dVz$ ,  $zVVd$ ,  $dVVz$ , に止らず、 $zVCVd$ ,  $dVCVz$  ( $V$ は母音、 $C$ は他の子音) あるいは $dVzVVC$ の終りの $C$ というような後続する音素の影響もあると推測される。細かくは今後、他の方法により再検討の必要があると思われる。

次に、 $z$ と $d$ の語彙による混同の相違を検討しよう。下に述べるのはすべて $z:d$ の対語である。 $\%$ は、混同していないもの、即ち正答率を、2校について調べたが大差ないので、粉河高校のみの結果を示せば次の通りである。

①	{(za)罪惡 (da)大惡	98(%) 73
③	{犯 罪 飯 台	84 49
⑤	{万 歳 番 台	73 76
⑦	{(ze)自然 (de)市電	96 33
⑨	{丹 前 炭 田	64 53
⑪	{心 臓 振 動	93 71
⑬	{賊 毒	82 71

②	{現 在 現 代	89(%) 29
④	{経 済 境 内	76 47
⑥	{存 在 尊 大	67 42
⑧	{全 部 臂 部	89 53
⑩	{(zo)草履 (do)道理	98 73
⑫	{象 堂	91 73
⑭	{肝 蔵 感 動	80 82

⑮	{地 蔵 児 童	78 93
---	-------------	----------

正解率の平均では

$za-83\%$   $ze-83\%$   $zo-84\%$

$da-52\%$   $de-46\%$   $do-58\%$

単純にこれらの結果を見れば、 $z$ の方が $d$ よりも混同しにくいということになるが、もう少し検討の必要がありそうである。 $z$ を持つ語の方が頻度数の高い語彙であるという可能性もあるかと思われる、一般に使われる語の方が正当率が高いということがあり得る。従って語彙を対象とした場合に意味の連想を伴う語自体の混同を考えに入れなければならない。

意味の連想を知るには、聴取実験に於いて、かな書きと同時に漢字を書かせるという方法がある。然しその結果からすればこの方法は成功したとは言えない。例えば、次のようなものを意味との関連に於て整理することはむずかしいからである。

現代(げんだい)を「げんだい(現在)」—8

「げんざい(現代)」—3

現在(げんざい)を「げんざい(現代)」—5

市電(しでん)を「しでん(自然)」—11

「しぜん(市電)」—3

自然(しぜん)を「しでん(自然)」—11

次に、混同の可能性のある音が1語に1音の場合について、どの音がどの音に聴き換えられたかをマトリクスにして示したのが表2

である。左のひらがなは、聴取実験に用いた単語中で発音された音を示し、上のカタカナは、それを聴取した結果の音を示す。例えば、語中の「ぎ」の音が「ダ」の音として聴取された数を%で示すと13%であり、「だ」の音を「ザ」と聞いたものは28%というように見ていただきたい。この結果を子音別にまとめたのが、右のマト

表2 単語の誤聴音マトリクス（聴取者45人による）

(1) ざぜぞ…はもとの音 ザゼゾ…誤聴された結果の音

	ザ	ゼ	ゾ	ダ	デ	ド	ラ	レ	ロ
ざ				13		0.3			
ぜ					10			0.3	
ぞ						12			0
だ	28						2		
で		32						3	
ど			10						3
ら	1			1					
れ		2			2				
ろ			1			0			

(2) 子音の別による集計

	z	d	r
Z		12	0.2
D	23		3
R	1	1	

リクスである。誤聴は  $z \rightarrow d$  より  $d \rightarrow z$  の方が明らかに多いことを示している。

先に述べた通り、アンケートの結果では、 $z$  から  $d$  への誤りが多いとする回答が、どの郡や市でも多かったのと、この結果とは対照的である。これに関しては後に無意味語の場合について比較を行うことにする。

前回に調べた兵庫県篠山町では、混同の多い単語は、(1)語頭の  $z \rightarrow d$ 、(2)Nの後の  $z \rightarrow d$  が主で、その他は少いという傾向があった。これは文献2)に示された和歌山方言集の集計結果と類似している。然し紀北の調査結果では次のようであり、必ずしも上記結果は

あてはまらない。

z → d (1)語頭18% (2)Nの後12% (3)その他12%

d → z (1)語頭15% (2)Nの後23% (3)その他25%

## 5.2 アクセントの相違による混同の差を、聴取の混同との関係に

於て検討した結果、文献2)において予測された通り、関連は少いと思われる。次に、同音でアクセントの異なる語彙とその聴取結果とを掲げる。％は正答率を示す。

### ＜粉河高校＞＜橋本高校＞

増	加	(○○○)	71%	65%
造	花	(○○○)	84%	65%
小	僧	(○○○)	78%	91%
子	象	(○○○)	78%	91%
暗	算	(○○○○)	67%	78%
安	産	(○○○○)	87%	91%
御	前	(○○○)	96%	91%
午	前	(○○○)	98%	100%

又、表3に、聴取実験に用いた大阪出身者の発音による録音テープのアクセントと、粉河出身者のアクセントに差のあるものを拾い出して、それに対する粉河高校生の正答率を示した。この結果からすれば、上記の通りアクセントの違いが正答率に影響を及ぼすことは少い。

表3 録音テープと粉河とのアクセントの違う単語—正答率

	録音テープ	粉 河	正答率
読 書	○○○	○○○	96
小 僧	○○○	○○○	96
左	○○○	○○○	93
骼 駄	○○○	○○○	89
御 前	○○○	○○○	96
心 臓	○○○○	○○○○	84
犯 罪	○○○○	○○○○	93
大 悪	○○○○	○○○○	73
存 分	○○○○	○○○○	82
丹 前	○○○○	○○○○	82
謎 謎	○○○○	○○○○	82
段 落	○○○○	○○○○	78
肝 臓	○○○○	○○○○	89
アザラシ	○○○○	○○○○	86
電々公社	○○○○○○○○	○○○○○○○○	96

更に、無意味語2拍語10単語について、夫々同一の音素構成で、○○○型、○○○型、○○○型、○○○型の4通りのアクセント型の発音により聴取実験を行った。○○○平板型が比較的正答率が高かったが、他の型には特別な差は見出せなかった。なお、この稿での無意味

語の聴取実験に用いた録音テープはすべて平板型(〇〇)に発音している。次にその無意味語についてのべる。

**5.3 無意味語の場合** 単語の場合は意味との関連があるから、誤聴される音は必ずしもその音の混同し易さを示すものと言い難い。

そこで、za、ze、zo、da、de、do、ra、re、roを夫々第1拍又は第2拍にして、これらのすべての組み合わせによる81組の2拍語無意味単語につき聴取実験を行った。その結果をマトリクスにして示したのが表4である。表2単語の誤聴音マトリクスと比較されたい。

**表4 2拍無意味語の誤聴音マトリクス** 数字は誤聴音数 単位は% 縦のざぜぞ…は聴取テープの発音 横のザゼゾ…は聴取者の認識

(1) 1拍目の音

	ザ	ゼ	ゾ	ダ	デ	ド	ラ	レ	ロ
ざ				14			11		
ぜ					15			16	
ぞ						34			3
だ	13						28		
で		12						53	
ど			13						15
ら	8			11					
れ		14			15				
ろ			8			40			

(2) 2拍目の音

	ザ	ゼ	ゾ	ダ	デ	ド	ラ	レ	ロ
ざ				14			9		
ぜ					14			10	
ぞ						26			3
だ	27						24		
で		23						42	
ど			21						6
ら	22			21					
れ		17			16				
ろ			13			31			

(3) 1、2拍合わせた場合

	z	d	r
Z		20	9
D	18		28
R	14	23	

語の聴取実験に用いた録音テープはすべて平板型(〇〇)に発音している。次にその無意味語についてのべる。

**5.3 無意味語の場合** 単語の場合は意味との関連があるから、誤聴される音は必ずしもその音の混同し易さを示すものと言い難い。

そこで、za、ze、zo、da、de、do、ra、re、roを夫々第1拍又は第2拍にして、これらのすべての組み合わせによる81組の2拍語無意味単語につき聴取実験を行った。その結果をマトリクスにして示したのが表4である。表2単語の誤聴音マトリクスと比較されたい。

表4 2拍無意味語の誤聴音マトリクス 数字は誤聴音数 単位は% 縦のざぜぞ…は聴取テープの発音 横のザゼゾ…は聴取者の認識

(1) 1拍目の音

	ザ	ゼ	ゾ	ダ	デ	ド	ラ	レ	ロ
ざ				14			11		
ぜ					15			16	
ぞ						34			3
だ	13						28		
で		12						53	
ど			13						15
ら	8			11					
れ		14			15				
ろ			8			40			

(2) 2拍目の音

	ザ	ゼ	ゾ	ダ	デ	ド	ラ	レ	ロ
ざ				14			9		
ぜ					14			10	
ぞ						26			3
だ	27						24		
で		23						42	
ど			21						6
ら	22			21					
れ		17			16				
ろ			13			31			

(3) 1、2拍合わせた場合

	z	d	r
Z		20	9
D	18		28
R	14	23	

単語の誤聴マトリクスの場合 $de \rightarrow ze$ 、 $da \rightarrow za$ の誤聴、即ち  $d \rightarrow z$  が多く、その反対の場合はそれより少なかった。然し表 4 における無意味音の組み合わせでは、子音の位置により混同に差があり第 1 拍目は $de \rightarrow ze$ 、 $da \rightarrow za$ の場合も、それと反対の $ze \rightarrow de$ 、 $za \rightarrow de$ の場合も似た結果となっている。又、 $zo \rightarrow do$ 、 $da \rightarrow ra$ 、 $de \rightarrow re$ 、 $ro \rightarrow do$ の混同が第 1 拍においては多く見られる。又子音別集計では単語の場合、その混同の順は $d \rightarrow z$ 、 $z \rightarrow d$ で、 $r$ の%が少なかったがこれら無意味音混同のマトリクス(3)を見ると、 $z$ 、 $d$ 、 $r$ の 3 音の相互の混同の割合が、比較的似ていることを示している。従って、漢語が問題ではなく単語自体の音素構成に関係があるかと思われる。

このマトリクス(1)(2)は、同一の音の誤聴の割合がその音の位置により異り、更に、介在する母音の種類によっても聴取結果が異なることを示している。下には $dara$  ( $dVrV$ )、 $rada$  ( $rVdV$ ) 等がどのように聴取される傾向があるか、1・2 拍の母音が同一の場合に母音と子音との関係がどのようなものであるかを示す。(V は母音を示し、太字は正しく聴取したもの、\*は誤聴の割合が、正しく聴き取ったものより多いものである。単位は%)

	$dVrV$	$rVdV$	$dVdV$	$rVrV$
$\left\{ \begin{array}{l} dara \\ rada \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 8 \\ 3 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 5 \\ 35 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 43* \\ 5 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 5 \\ 30 \end{array} \right.$
$\left\{ \begin{array}{l} dere \\ rede \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 11 \\ 0 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 0 \\ 22 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 8 \\ 3 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 70* \\ 32* \end{array} \right.$
$\left\{ \begin{array}{l} doro \\ rodo \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 41 \\ 0 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 3 \\ 57 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 22 \\ 8 \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} 8 \\ 19 \end{array} \right.$

これを見ると、母音により聴取結果に差があることがわかる。即ち、 $dara$  の場合は  $d$  の影響力が強く  $r$  はそれにひかれる。 $dere$  の場合は  $r$  が優位で第 1・2 拍子音ともに  $r$  となり、 $doro$  の場合は  $d$  と  $r$  との力が比較的均衡している。

この関係が  $z$  と  $d$  に関しては少し異り、 $daza$ 、 $zada$  は安定しているが、 $deze$  と  $zede$  では  $deze$  が  $reze$ 、 $zede$  が  $zere$  となる傾向がある。 $dozo$ 、 $zodo$  に関しては、正答の外に  $dodo$  になる傾向もある。

このように子音の聴取が母音によっても影響を受けることがわかる。当然、調音結合により発音自体にも問題があるはずであるが、混同者以外の聴取結果に誤聴が稀であるから、誤聴の理由がどこにあるか更に検討を行う必要があり、知覚実験の材料としても興味ある問題を提供していると思われる。

次に、単語の誤聴及び無意味音の誤聴の結果とこれらを発音した場合における混同とについて比較を試みた。

## 6. 聴取と発話との関係

粉河高校 45 人中、約 4 人に 1 人の割で抽出した 11 人につき、その発話と聴取との関係を検討した。

先ず漢語が主な混同単語であるか検討し、併せて聴取と発話の関係を検討するために前述の 115 単語を、日常によく使う主に和語と漢語、外来語に分けると、日常語(恙、風、団子、左、泥棒等) 37

語、漢語（堂、読書、奴隸、造花等）72語、外来語（ラジオ、デザイン、ロボット等）6語である。これらを聴取と発話の夫々の混同別に分類すると次のようになり、この結果によれば、混同は漢語に多いが、必ずしも漢語ゆえの混同とばかりはいえないことになる。

	聴取の混同	発話の混同 (%)
日常語	12.0	17.7
漢語	21.6	26.0
外来語	9.1	7.0

次に、11人の聴取に混同の多い単語を順に10個とり、それらと、混同の全くない単語についてその発音の混同との関係を示すのが図6である。これは、聴取の混同人数を縦軸にとり、発音の混同の人数を横軸にとって、その相互の関係を示したものであり、明らかに発話の混同が聴取の混同に深くかかわることを示すものである。

図7は、単語と無意味語とが、それぞれ聴取と発話においてどのような関係にあるかを示したものである。これは、115単語につき11人が誤聴し又は訛った単語の数を、z→d、d→zに分類し、合計して%で示し、同様の方法で無意味語45個の場合をも処理し示したものである。その結果、単語においては、発話の方が聴取よりも混同が多く、無意味語の場合は、聴取の方が発話よりも混同が多い。しかも、無意味語の方が単語の場合よりも特に聴取に誤りの多いことが明らかになった。

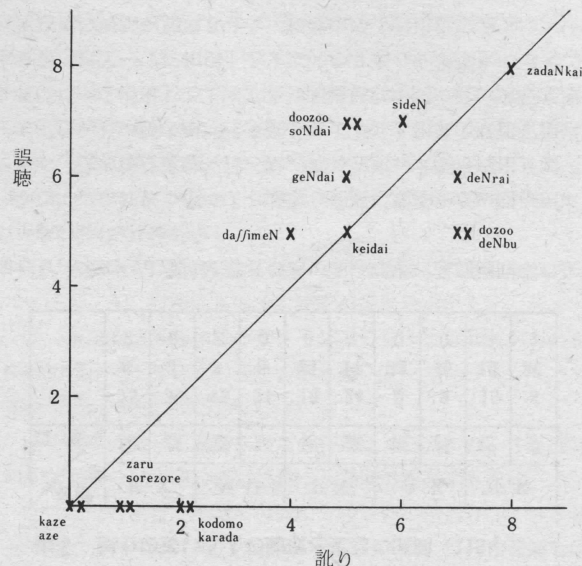


図6 聴取の混同と発話の混同との関係

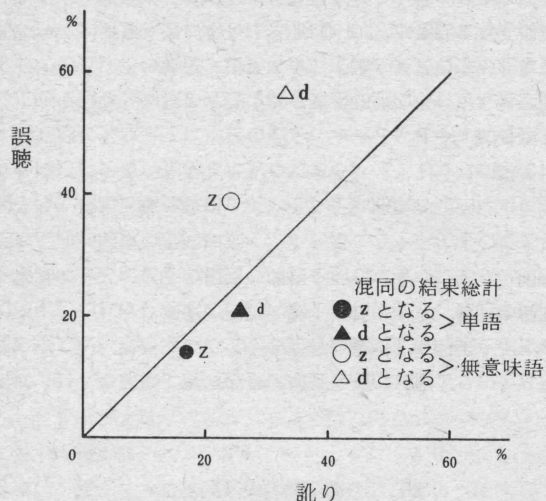


図7 聴取の混同と発音の混同—単語と無意味語の場合—

表5は、115単語につき、粉河高校生11人銘々の誤聴と訛り音に関する上記と同様の集計結果の中、誤り数の多い生徒から順に5人を選んでその結果を示したものである。KYとMUとは $d \rightarrow z$ が多く、AKとTKとは、 $z \rightarrow d$ が多い。TNには片やりが少い。従

ってこの表は、混同の型に、 $d \rightarrow z$ 型、 $z \rightarrow d$ 型と $z \leftrightarrow d$ 型ともいふべき3通りの型のあることを示唆している。無意味語についても全く同様の結果となって居り、 $z \rightarrow d$ 型には更に $\rightarrow r$ となる傾向が

表5 誤りの多い5人の聴取と発話の混同 (115単語)

被験者 誤り音	K.Y		M.U		T.N		A.K		T.K	
	聴	話	聴	話	聴	話	聴	話	聴	話
$\rightarrow z$	15	39	12	21	16	24	2	9	15	6
$\rightarrow d$	6	3	7	6	20	14	33	45	19	34
$\rightarrow r$	2	0	2	0	0	1	0	0	3	1

加わる。又 $z \leftrightarrow d$ 型には発音のあいまいな者、又は混同率の少ないものが多い。

そこで、これらの型による聴取と発話の関係をなお明らかにするために、次の様な実験を行った。即ち先ず、大阪市内出身者(HT—まぎらわしいので単に「大阪」とよぶ)と和歌山県那賀郡岩田出身者(SU—「岩出」とよぶ)及び両地域の間近くに近い大阪府岸和田出身者(HY—「岸和田」とよぶ)の3名の女子学生につき、上記粉河高校の発話を聴取させた。和歌山の「岩出」の発音は $z \rightarrow d$ 型である。

115単語の聴取結果、「大阪」の成績を仮に100%とした場合、「岩出」は64.7%、「岸和田」は78.3%で、これらは夫々の発話の結果

とよく比例している。 $z \rightarrow d$ 型の「岩出」が上記表4にある $d \rightarrow z$ 型のKYの発話と、 $z \rightarrow d$ 型のTKの発話とを聴取した結果を夫々「大阪」の聴取結果を100%としたものと比較し%で示すと次のようになる。

$d \rightarrow z$ 型の発音を聴取した結果 55.6%

$z \rightarrow d$ 型の発音を聴取した結果 73.0%

$z \rightarrow d$ 型の話者には、聴取に同様のパタンのあることが推測されこのことは、ザ・ダ・ラ行の発音の混同が、その聴取に基づいていることを更に裏付けられるものと言えよう。これらの結果は、ザ行・ダ行・ラ行の混同が、単に“新しい語を発音する場合の音のとりちがえ”<sup>3)</sup>というものではなく、聴取に関連する根強いものであることを示すものといえよう。

又、ダ行からザ行の型と、ザ行からダ行へ又ラ行への型とこの2種の型には何か別の要因があるのではないかとの臆測も生じるが、これについては様々の角度から検討を行う必要があると思われる。

## 7. おわりに

以上、ザ行ダ行ラ行の混同について、先ずアンケート調査により和歌山県下の概観を行い、次に紀北の場合について主として粉川の高校に於ける聴取実験資料並びに録音資料を土台に考察した結果を報告した。以上を要約すれば次のようになる。

### I. 聴取実験の結果からすれば、

(1) 混同し易い単語には、一つの単語に2つ以上、 $z$ 、 $d$ 、 $r$ の共存しているものが多い。その条件を持つものには漢語が多い。

(2) 一つの単語に $z$ 、 $d$ 、 $r$ のいずれかが1箇所ある場合、混同され易い単語は、アンケートの結果又は一般に指摘されるような $z \rightarrow d$ の傾向よりもむしろ $d \rightarrow z$ の方が多い。 $z \rightarrow d$ がこれに次ぎ、 $d \leftrightarrow r$ もあるが、 $z$ と $r$ とは比較的混同されにくい。これは、対象とした単語の音素構成とも関係があると思われる。

(3) 単語の場合に比べると、無意味音の場合は、必ずしも上記の結果と一致せず、 $z \rightarrow d$ 、 $d \rightarrow z$ の混同の程度には差がなく、 $d$ と $r$ との混同が比較的多い。

(4) 無意味音の場合、 $z$ 、 $d$ 、 $r$ の位置並びにその間にある母音 ( $a$ 、 $e$ 、 $o$ ) の別によっても聴取結果に差が出る。

(5) 単語及び無意味語のアクセントの差による混同率への影響は文献3)に於て予測された通り、認め難い。

### II. 聴取と発話との関係は、

(1) 聴取に関して混同率の高い語集は、発話においても混同され易く、聴取の混同率の低い語集は、発話の混同率も低い。

(2) 紀北の場合、発話の混同に3通りの型があり ( $z \rightarrow d$ 型、 $d \rightarrow z$ 型、 $d \leftrightarrow r$ 型) 例えば、 $z \rightarrow d$ 型の人が、これら3通りの型の人々の発話を聴取すれば、同じ型に属する発話は正しく聴取し得るが、 $d \rightarrow z$ 型の聴取では誤聴率が高くなる。これは、聴取と発話との関係の深さを示すとともに、混同は、単なる一時的な又は語による現象でなく根強いものであることを示していると思われる。

初めに掲げた文献2)に於ては、漢語に混同の多いことが指摘され、そこから“新語の受入れによる音の取りちがえである”とされたと、上記の結果からすれば、音自体の混同が先であり、和語より漢語に混同が多いのは、主として、その音素構成に由来するものと思われる。

図1に示した言語地図に見る混同の分布からしても、この混同が何に由来するものか、音韻変遷の問題とも関連して更に考察を続ける必要があると思われる。今後和歌山県中央部又は南部に関し又他の府県についても検討を続ける予定である。今回、丹波篠山の資料との比較、高年令者の場合の両者の比較等、既に整理した資料で扱えなかったものもある。併せて今後の機会にゆずるものとする。

なおこの研究に於ける著者の役割りは次の如くである。木村恵子は粉川出身者であり、聴取実験及び録音等、主として資料の蒐集整理に当たった。稲田裕子は、大阪市出身、もとNHK放送劇団員であり、聴取実験用録音テープの発話及び録音、また、録音資料の多くを聴取した。杉藤は、前回の篠山調査と同様、この調査を計画し、資料を作成した。それにもとづき考察を行い、この稿をまとめた。従って、この稿は3者の共同作業によるものだが、その責任は杉藤が負うべきものである。

この研究に際しご協力いただいた粉河高校、粉川中学校、橋本高校、和歌山商業高校の先生方並びに生徒の方々、又以下に書きしるす、アンケートにご協力いただいた各校の校長先生、担当の先生方に対し厚く御礼申しあげる。多数の先生方のご要望にそうべく今後

、教育に役立つ方向をも検討したいと考えている。

この研究に格別のおはげましたいただいた原田芳起先生、恩師泉井久之助先生には感謝の外ない。

なお、この研究は、文部省の科学研究費の助成を受けて行ったものであることを記して感謝のことばに代えたい。

#### ○アンケートに協力された学校名

##### 小学校

一和歌山市一吹上小学校・雑賀〃	
一那賀郡一岩出小学校・根来〃・上岩手〃・池田〃・田中〃竜門	
〃・川原〃・鞆淵〃・桃山〃・丸檜〃・中貴志〃	
一伊都郡一笠田小学校・大谷〃・三谷〃・四邑〃・志賀〃・新城	8
〃・天野〃・高野口〃・信太〃・応其〃・九度山〃・河根〃・丹生	
川〃・杖ヶ敷〃・高根〃・高野山〃・白藤〃・湯川〃	
一橋本市一紀見小学校・橋本〃・学文路〃・隅田〃	
一海草郡一加茂第一小学校・野上〃・下神野〃	
一海南市一内海小学校・亀川〃・中野上〃	
一有田市一初島小学校・箕島第一〃・宮原〃	
一有田郡一湯浅小学校・広〃・八幡〃	
一日高郡一和田小学校・三尾〃・内原〃・衣奈〃・和佐〃・山野	
〃・三百瀬〃・船津〃・高津尾〃・子十浦〃・川原河〃・笠松〃・	
上初湯川〃・丹生ノ川〃・清川〃・島ノ瀬〃・城西〃・南部〃・岩	
代〃・ほくそ川〃・上洞〃・稲原西〃・印南〃・切目川〃	

御坊市 御坊小学校

田辺市 田辺第一小学校・新庄〃上芳養〃

西牟婁郡 白浜第一小学校・南白浜〃・椿〃・生馬〃・岩田〃・岡〃・市ノ瀬〃・栗栖川〃・近野〃・鮎川〃・下川〃・平瀬〃・上野〃・豊原〃・三川第一〃・木守〃・向山〃・周参見〃・佐本〃・見老津〃・玉伝〃・日置〃・安宅〃・安居〃・田野井〃・赤瀬〃・串本〃・錦富〃・橋杭〃・潮岬〃・出雲〃・大島〃・須江〃・檜野〃

一東牟婁郡一勝浦小学校・妙法〃・籠〃・太田〃・太田川〃・出合〃下里〃・田原〃・古座〃・西向〃・高池〃・明神〃・小川〃・田川〃・七川〃・熊野川〃・赤木〃・小口〃・滝本〃・鎌塚〃・敷屋〃・請川〃・高津〃・本宮〃・北山〃

一新宮市一蓬萊小学校

### 中学校

一和歌山市一東中学校

一那賀郡一岩出中学校・打田〃・那賀〃・桃山〃

一伊都郡一妙寺中学校・笠田〃・花園〃

一橋本市一橋本中央中学校・学文路〃

一海草郡一野上中学校・国吉〃・長谷毛原〃

一海南市一海南第一中学校・海南第三〃・巽〃・東海南〃

一有田市一初島中学校・箕島〃

一有田郡一吉備中学校・八幡〃

一日高郡一松洋中学校・日高〃・衣奈〃・白崎〃・丹生〃・早蘇

〃・大成〃・川中〃・川上第一〃・愛徳〃・竜神〃・上南部〃・南部〃・真妻〃・印南〃・切目川〃

一御坊市一河南中学校・名田〃

一田辺市一新庄中学校・中芳養〃・三栖〃

一西牟婁郡一白浜中学校・富田〃・上富田〃・鮎川〃・富里〃・三川〃・周参見〃・佐本〃・江住〃・川添〃・三舞〃・和深〃・潮岬〃・田並〃・大島〃

一東牟婁郡一字久井中学校・那智〃・色川〃・太田〃・下里〃・田原〃・西向〃・熊野川〃・本宮〃・四村川〃

一新宮市一緑丘中学校・城南〃

### 高等学校

一和歌山市一和歌山東高等学校・星林〃・和歌山工業〃・和歌山商業〃

一伊都郡一笠田高等学校

一橋本市一橋本高等学校

一有田市一箕島高等学校

一有田郡一吉備高等学校・耐久〃

一日高郡一南部高等学校

一御坊市一日高高等学校・御坊商工〃

一田辺市一田辺高等学校・田辺工業〃

一西牟婁郡一熊野高等学校・串本〃

一東牟婁郡一古座高等学校

文 献

(七五頁より続く)

1)比企静雄他：日本語における舌と口蓋の接触パターン——ダイナミック・パラボグラフィによる観察、国立聴力言語障害センター発行、1975—3.

2)杉藤美代子・中野節子：ザ行音とダ行音の混同について——兵庫県多紀郡の場合——日本方言学会第20回研究発表会発表原稿集、1975—5.

3)原田芳起：ダ行ザ行間の訛りについて——その誘因に関する臆説——、東條操先生古稀祝賀論文集、近畿方言学会編、1955—4.

4)大石初太郎、上村幸雄：方言と標準語——方言学概説、筑摩書房、1975—1、p. 233、p. 235、p. 270、p. 300、p. 319、p. 342、p. 376.

5)村内英一：和歌山県方言、近畿方言の総合的研究、(楳垣実編)三省堂、1962—3.

(1976.5.13)

国語国文学 36号 名古屋大学  
国文目録 14号 日本女子大学  
文芸研究 78～80号 日本文芸研究会  
ノートルダム清心女子大学文科紀要 8号  
並木の里 10号 「並木の里」の会  
文学史研究 16号 大阪市立大学  
人文研究 26巻 3分冊 大阪市立大学  
女子大文学 26号 大阪女子大学  
語文 32輯 大阪大学  
人文学報 11号 東京都立大学  
人文科学紀要 60輯 東京大学  
国語学研究 14号 東北大学  
文学論叢 49号 東洋大学  
短期大学紀要 6号 東洋大学短期大学  
東海学園国語国文 7・8号  
苫小牧工業高等専門学校紀要 10号  
文学科紀要 2号 富山大学文学部  
学術研究 23号 早稲田大学  
国文学研究 55～57号 早稲田大学  
和洋国文研究 10・11号 和洋女子大学  
古典と近代文学 15号 有精堂出版